

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第826号 平成26年10月28日

命の教育

空知の南幌町で母親と祖母を殺害したとして高校2年生の女子生徒が逮捕された事件は、教育関係者に大きな衝撃を与えています。

この事件は、南幌町の住宅で47歳の母親と71歳の祖母を包丁で切りつけ殺害したとして、10月1日、17歳の高校2年生の女子生徒が殺人の疑いで逮捕されたというものです。

女子生徒は警察に対して、「しつけが厳しく、今の状況から逃れたかった」と供述しているとの事です。しかし、学校では次期生徒会長に就任する予定だったという程の優等生だった彼女は、一体何故、祖母と母親という二人の肉親を殺害するに及んでしまったのでしょうか。マスコミやネットでは、家庭内で祖母の躰に名を借りた虐待があり、それが今回の事件の原因と見ているようです。

実際、2004年の2月、当時幼稚園児だった女子生徒が家庭内で虐待を受けているとの通報が岩見沢児童相談所にあり、児童福祉司が身体的虐待の痕があることを確認し、児童福祉法に基づく指導措置を決定した経緯があるようです。

岩見沢児童相談所では、その後同年11月まで、自宅の訪問や面談を重ね、「虐待が再発する心配はない」と判断し措置を解除したとしています。現時点では警察はあくまで捜査中であり、真相は未だ何も明らかにはなっておりませんが、もしかしたら、今でも見えない所で虐待があった可能性は否定できません。

親が子を虐待し、殺してしまうという最悪の事件は後を絶ちませんが、その度に、子どもの命を守り切れなかった児童相談所や学校が批判の対象にされて来ました。

今回の事件は、子が親や祖母を殺してしまうという逆のケースとはいえ、子どもを守り切れなかったという点では同じではないでしょうか。今後、児童相談所や学校、更には地域の対応に問題がなかったのかどうか、十分検証する必要があると思います。

児童相談所の場合、自宅の訪問や面談を重ね、「虐待が再発する心配はない」と判断し措置を解除したとしています。それから10年間は虐待の通報はなかったようですから、児童相談所としての対応には限界があると思います。

そうはいつでも、虐待は一度収まったように見えても、再発する恐れは常にありますし、見えない所での虐待の可能性もありますので、児童相談所としては、そうした点も常に視野に入れて対応していただきたいと思います。

ただ、虐待問題にきめ細かく対応するには、人員や予算等の面で児童相談所の体制はまだ不十分ですので、今後一層の充実をお願いしたいと思います。

また、今回の事件に関しては、地域住民の対応にも問題がないとはいえません。

事件後に、地域の方々からマスコミを通して、女子生徒に対する祖母の虐待に関する情報が流されていますが、仮に、地域の方々虐待と思われる事態を把握していたのであれば、速やかに児童相談所や学校、あるいは警察に通報すべきでした。そうしていれば、今回の事件は避けられた可能性は高いと思われます。

また、女子生徒が通う学校側では、今回の事件は信じられないという状況のようです。

ただ、女子生徒は、これまでに何のシグナルも発して来なかったのでしょうか。また、学校側では、普段から、女子生徒はもとより生徒達の気持ちをくみ取る努力をどの程度して来たのでしょうか。

少なくとも女子生徒は、家族とは別棟で1人で寝起きているという状況にあった訳ですから、家庭訪問等を通して家庭の状況をもう少し踏み込んで把握する必要もあったのではないかと感じられますが、どうだったのでしょうか。いずれにせよ、学校としては、何が出来、どうすべきだったのか、検証する必要はあるでしょう。

今回の事件を受け、北海道教育委員会は今月6日、周辺地域の高校の校長らを集めた緊急の会議を開催し、今回の事件を1つの学校の出来事と捉えるのではなく、全ての学校が自らの問題として向き合う事や、学校が保護者とも連携して「命を大切に教育」を充実させる事等を改めて確認したとしています（10月6日付NHK北海道 NEWS WEBから）。

全ての学校が今回の事件を自らの問題として向き合っていかなければならない事は当然ですが、保護者が虐待の当事者である場合、学校と保護者との連携は事実上困難だといわなければなりません。だからこそ、学校側としては、児童相談所や警察との連携を密にし、情報を共有する普段の努力が必要なのだと思います。

また、「命を大切に教育」の充実が再確認されたとの事ですが、「命を大切に」というのは自明の事であり、それだけに「命を大切に」といったからといって、それで子ども達の心の深層に届くかといえ、それはそう簡単ではないでしょう。

筑波大学の土井隆義教授（社会学）は、「命の教育」に関して「他者への想像力を育む教育」の重要性を指摘しています（10月3日付北海道新聞から）。

学校としては、この機会に、これまでの「命を大切に教育」の取り組みに関して検証すると共に、より内実を高める努力をすべきだと思います。

今回の事件に関しては、真相も明らかではありませんので軽々に述べる事は出来ませんが、表向き優等生が引き起こした今回の事件は、学校はじめ児童相談所や警察、更には地域に対して極めて重要な教訓を残したといえましょう。

（塾頭：吉田 洋一）